解説

人類を表現する諸用語とその概念について

江 原 昭 善

Verschiedene Ausdrücke über den Menschen und ihre Begriffe

Akiyoshi EHARA

最近、「人間」という言葉に代って、「人類」という言葉が、かなり頻繁に使用されるようになった。たとえば、「人類の平和と繁栄」とか、「人類共通の敵」、「人類愛」、「人類福祉」、「人類の使命」等々、枚挙にいとまがない。

「人類」という言葉は、そもそもの初めは、他の動・植物群と区別する、生物学的な分類語（正式の分類学名ではない）であって、そうみだりに世上で使用される言葉ではなかったはずである。

そうだった理由については、後ほどふたび触れることとして、生物学的存在である人類は、第四紀の初めには、すでに直立二足歩行性という運動様式・生活型を完成させていた。そのよい例は、南および東アフリカ出土の、オーストラロピテクス類 *Australopithecinae* にみられる。彼等の骨盤や下肢の構造は、類人猿とは異なり、明らかに人類的だった。しかし、頭部全体の特徴は、むしろ類人猿に近い印象をあたえ、脳容量は 600 cc 前後で、現存人類の半分にも満たない。彼等は人類進化の一段階を示すものとして、学名とは別に猿人類と呼ぶことが多い。

かつてジャバで発見された、ピテカントロプス (*Pithecos*=サル+*Anthropos*=ヒト) 群は、ジャバ猿人と呼ばれたが、現在では周口店発見のペキン原人とともに、原人類と呼び改められ、猿人類につづく、人類の一進化段階を代表する語として用いられている。

原人類は、さらにネアンデルタール人で代表される旧人類段階を経て、新人類、つまり現存人類へと進化したと考えられている。

以上のことから、ある程度想像できるように、直立二足歩行性は、人類のもっとも、普遍的・基礎的特徴で、かつ、もっとも古く獲得された性質である。しかし

ながら、頭部ことに大脳の発達は、第四紀になってはじめて類人猿的レベルから新人類レベルまで、生物界でも異例の大脳化現象を遂げ、多くの問題を提起した。つまり人類進化は、「あたま」からではなく、「あし」からはじまったというわけである（進化の非相索性）。

第四紀において、とりわけ重要な出来事は、上記の大脳化現象と、ほぼ平行して、人類は文化を創造し、発達させ、ついには生物界を脱却して、新しい文化的次元にも所属するようになったことである。

つまり、人類が無機的・物質的次元に属すると同時に、さらに高次の有機的・生物学的次元に所属することは明らかであるが、文化の獲得を契機に、生物学的次元をもこえた、超有機的・文化的次元にも所属することになったといえよう。このことは必然的に、人類の解明には、各次元からのアプローチおよびその統合化の必要性を示している。換言すれば、人類の解明には生物学的説明だけでは不可能で、社会科学的アプローチをも必要とし、下位次元からの演えきの解明は、あたかも人間が物質的次元にも所属するからといって、すべて物理・化学的概念で規定するのと同じ誤りをおかすことになる。同様に生物学的法則は文化的現象の説明には役立たず、逆もまた成りたつ。

人類がみずからのために創り出した文化は、このようにして、文化的次元における独自の法則のもとに、幾何級数的に急速な進歩を遂げ、ついには文明化・機械化の増大が、人類の意志とは無関係に、皮肉にもその担い手である人類を疎外し、危機感をあふるまでに立ち到った。

このような事情のもとで、地球上のあらゆる個々の種族感情をこえ、国民・民族感情をこえて、ひとつの共通の感情で結ばれた、最上位の概念として、「人類」とい

う語が「人間」に代って世上に流れ出たとみるべきだろう。そこには、人間のもっとも奥深く横たわる存在根拠、つまり生物学的存在からアピールするものがあるからである。

人類学が対象とする人間は、かくも複雑な存在であり、解剖学や生理・生化学、心理学や社会行動学その他のように、人間の側面的現象に限定された学問体系のみでは不十分で、おのずから複合科学たらざるを得ず、また複合的であるところに、人類学の特自の学問的意義が

	属名	種名	亜種名
Pithecanthropine 猿人類	{Australopithecus Australopithecus	africanus robustus	
Archanthropine 原人類	{Homo Homo	erectus erectus	javaensis pekinensis
Palaeanthropine 旧人類	Homo	neanderthalensis	
Neanthropine 新人類	{(Homo Homo	sapiens sapiens	neanderthalensis)

となる。

Linnaeus 1858 が、生物一般の表現法として二名法を採用し、ヒト(人類)を生物界に所属せしめて、Homo sapiens と命名したこと、その定義として、ギリシャのソクラテスの座枯の銘「汝自身を知れ」から「理智あるヒト」としたことなど、あまりにも有名である。

人類学的に、一般にヒトないし人類といった場合、それが科・属・種のどのカテゴリーをさしているかは、必ずしも明確ではなく、必要に応じて、Hominidae, Homo, sapiens 等とカテゴリーが明示される。

日常よくきく hito なる語は、「ヒト」をさすか「ひと」をいうのか、また「人」を意味するのか、きわめてあいまいで、事実各言葉の間に厳密な区別がうすれてしまっている。しかし、吾々は状況に応じて適当な解釈を下したり、その都度各自が主観的に概念規定を施しているのが実情である。

これらの語は、完全に同じではなく、こまかいニュアンスおよび言葉の成立過程に相異がある。

やまとことば(日本古来からの語)でいう「ひと」は、ギリシャ語の Anthropos, ラテン語の Homo とはその概念を異にする。中国語でいう「人」は、万物の霊であり、言(弁)をもつことを意味した。Anthropos や Homo は、中国の「人」と意味の上で完全に一致する。やまと民族は、漢字の渡来とともに、中国からこの「人」の語を学び、これに、その当時までもっていた「ひと」というやまとことばを対応させたと考えられている。

あるといえる。

その場合、人類学では対象を、科学的にとらえるために、生物学的分類用語を採用し、ヒト科(Hominidae)・ヒト属(Homo)・ヒト種(sapiens)と表現する。わざわざ片カナが使用されているのは、それが日本語における分類学名であり、人類という語はここではヒトに相当する。この正式の用語に従うと、前述の猿人類・原人類・旧人類・新人類の各進化の諸相を示す人類(=ヒト)は、すべて Hominidae に属し、

しかしながら、本来の「ひと」という言葉は、Homo や Anthropos や「人」などより、意味がずっとひろく、後述の人間という言葉とも、はっきり相異している。たとえば、「ひとのものをとる」とは、人間や Anthropos のものをとることではなく、他人の所有物をとることであり、「ひとのことは、かまわないでくれ」といった場合、この「ひと」は自分を意味する。同様に「ひとでなし」の「ひと」は道徳人を意味し、「ひとがわるい」「ひととなり」の「ひと」は性格や品格をいう。これらのどの「ひと」という語も、人間・人類・人・ヒト・Anthropos・Homo などの語では置きかえることができない。

今日、多くの場合に、hito とほとんど同じ意味で用いられる「人間」なる語は、仏教の影響から生じたもので、本来は hito と hito との間、つまり human relation ないし hito の世や世間を意味するだけで、人とかヒトの如き実存性の概念ではなかった。それが次第に人と同義語として誤用されるようになったのである。

以上で、生物学的概念をもったヒト・人類等と、社会的次元に属する人間、その両次元にあいまいにまたがる人・ひと等の言葉の相異が、ある程度明らかになると同時に、その存在様式の複雑さも理解できたことと思う。

ここで改めて、人類学的表現としてのヒトが、どのような具体的内容を有するかということに簡単に触れておきたい。

吾々人類が、生物学的に分類されるとき、当然生物学

一般の概念や分類規準に則って行われるべきである。そのための分類学は、主として形態学を土台とするものであったが、1940年台になると、さらに広い生物学的観点から行われるべきことが強調され始めた。個々の分類単位 (Taxon) は、かなりの変異幅をもった遺伝的集団であり、それは進化の結果生じたものであって、Taxon の合理的配列は進化や、系統発生をも示すものであるべきだ。

しかし、古生物学的次元に於ける人類化石は、往々にして分類学的精神を無視して、不用意にも、個々の化石に対して形式だけを生物学的二名法で呼ばれることが多い。そのため多くの混乱や系統関係の不明化を生じている (たとえば、前記 *Atstralopithecus* が3亜科・4属・5種に分類)。さらに、たとえば、*Sinanthropus pekinensis* とか *Pithecanthropus erectus* など、この命名からすると属のレベルでの相異になるが、今日の白人とピグミーほどの相異もなく、多くの点で同属・同種と考えた方が、はるかに矛盾がない (*Allopatric species*)。このようなことから、現在では、すでに記したように、*Homo erectus* と呼ばれるようになった。最近、*Homo habilis* (1964, Olduvai 出土) なる語でもうかがえるように、*Australopithecus* 群も、*Homo* のレベルに入れようとする傾向すら出て来ている。

いずれにせよ、化石という時間的・空間的位置付けの異なるものを、分類するために生ずる困難さは、進化速度が速く、多様性に富み、かつ第四紀という、進化的次元では比較的短期間に、猿人段階から新人段階へまで進化した人類に特に大きな障害となる。

困難はこれに留まらない。人類ないし *Hominidae* の

もっとも基本的・普遍的な特徴、換言すれば、もっとも初期の人類の獲得した特徴として、直立二足歩行性およびその生活型に適応した形態学的諸特徴があげられる。この機能的特性と化石という形態的特性とをどう対応せしめるべきか？

Homo 属としては、道具の使用・製作 (ごく初期の道具使用・製作段階から、道具で他の道具を製作する第2次的道具の段階まで含む) が一応の目安としてあげられるが、これは分類規準としては、すでに生物学的次元をはみ出している。勿論これらの能力と対応する脳神経系統の発達およびそれを裏付ける脳容量、それに伴う頭蓋骨の形態特徴など列挙し得るが、ここにおいても、前記同様機能的特徴と形態的特徴の対応性ということが問題になる。

道具製作能力 (言語能力も含む) という点では、形態学的特徴は、ほとんど役に立たず、最近の類人猿の生態研究などから、絶対的規準ともいい難くなって来た。さらに、直立二足歩行的生活形態 (*Hominidae*) そのものが、すでに道具使用・製作 (*Homo*) の必要条件を充すものであり、*Homo habilis* (前出) は、その分類名は別として、この見解を無言の中に支持していることになる。

その他、文化的・言語的区分に重点を置いた「民族」とか、生物学的区分としての「人種」など、同じヒトを研究するに際しても、そのアプローチの方法や目的に応じて、用語の慎重な取り扱いが必要であると同時に、人類の存在様式の多次元性・複雑性を物語るものといえるだろう。